
闇より黒い

狼之羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇より黒い

【Zコード】

Z6393C

【作者名】

狼之羊

【あらすじ】

人間と【人間の異形の者】は長く争いを続けていた。人間に憎しみを燃やす異形の者フウマは、謎の少女ルリと出会い、少しづつ心を変えていく。しかし、ルリの体には恐ろしい力が眠っていた。

序（前書き）

初投稿です。

下手な小説ですが、読んで頂けたら幸いです。

序

いつも青白い光を放つ月が今日に限って赤かったのを、ルリは一生忘れられないだろうと思つた。

冷たい夜だった。

何時間も吹き晒された肌は体温を失い、感覚もない。何も言わず、ただ翼を動かすクルリは、疲れからか息切れが激しかった。

気軽に休もうか、とは言えない。クルリも休みたいとは言わない。今はただ、こうして飛び続けるしかないのだ。目指す場所が遠いのか近いのかも、ルリには分からない。分かる事はそこに辿り着かなれば、自分もクルリも死ぬという事だけだった。

一夜にして、沢山のものを失つた事を、ルリはほとんど自覚していなかつた。

意識が朦朧としている今では、今日何が起こり、どうして森を彷徨つているのかも分からなくなっているかも知れない。ルリの虚ろな黒い瞳には、木々の切れ間に時々見える、赤光の月が映っていた。

かん高い鳥の声が一際大きく鳴り響いた。この樹海全体の動物への警戒音だ。

大木の合い間に顔を出す岩の、一番見晴らしの良さそうな所を選んで、少し小柄な少年がその大岩に飛び乗つた。

髪は冷酷を孕んだ銀色。瞳の色は狂氣を帯びた金色。

無駄のないしなやかな動きは、まるで豹か何かの動物のようだ。鋭利な目つきで依然として鳴り止まない鳥の警戒音の響く樹海を眺める。

余程の事では、これほど鳥が警戒する事はない。この音が鳴り響く

のは、たつた一つ。

人間の侵入を確認した時だけだ。

少年は注意深く辺りを警戒しながら、しばらく緑一色の鬱蒼とした森を眺めた。

ハンターは獲物を捕捉してからでなければ動かない。やがて、少年は何かを見つけ、微笑んだ。

その笑みは、決して少年の持つ無邪気なものではない。獲物を見つけ、その命を狩れる事に至上の喜びを得たハンターの笑みだった。次の瞬間、少年は何の反動もつけず、視線の先へ跳躍していた。それは、跳躍というより、もはや飛翔だった。

着地を待たず、木々の枝に掴まって勢いを殺し、森の奥へ目を凝らす。

昼間とはいえ、この樹海は薄暗い。獲物の元に正確に降りられたのか、確認したかった。

少年の6・0の視力は森の奥へひた走る、獲物の背中を捉えた。ビンゴ。

少年の獲物は六人いた。全員、弓と矢筒を背負っているのを見ると、どうやら弓矢隊からはぐれたらしい。

人間達は誰もが必死の形相で逃げている。何かから逃げている。彼等は本能で知っているのだ。走れなくなつた時が世界の終わりだと。

だから逃げていた。彼等は誰一人知らない。彼等の世界を終わりにするものは、すぐ後ろに、少年が地面を一蹴りした瞬間にには、すぐ横に迫つていた事を。

少年の手には武器は何もない。しかし少年は慌てたりしなかつた。武器とは人間が使うものである。狩りに使うのはこれだけでいい。よく研がれた人差し指の爪。

六人はほぼ一列で走っていた。隊列を組む訓練で、そう走るよう習つたのだろう。

彼等人間の目では捉えることは出来なかつたが、少年はジグザグに

縫うように、その列を走り抜いた。

その時間は、刹那だつた。

抜かした六人を少年は振り返つた。その時、耐え切れなくなつたよう、六人から血が吹き出す。ほぼ同時に崩れ落ちて、一度と動く事はなかつた。

少年は人間の骸を一べつして、踵を返そうとした。

「埋めてやろうぜ、フウマ。」

鳥の声も収まつた、全く音のない森に突然声が降つて来た。フウマと呼ばれた少年は睨むように自分のすぐ右側にある木の枝を見上げた。そこに気配がある。

「…シユン。」

シユンと呼ばれた人物は自分の居所がバレたと知つて、ゴソゴソと降りて來た。

長身の青年が生い茂つた葉の中から姿を現した。

「俺の監視か？ご苦労な事だ。」

シユンは手近な太い枝に長身の体を窮屈そうにたたんで座り、愉快そうに笑つた。

「気にはんな。好きでやつてる。」

茶髪で色素の薄い黄色の瞳。その笑みには、人馴れした猫のように、したたかで人懐っこい雰囲気がじみ出ている。

「何だよ、驚かせたつもりだつたのに。尾行がバレてたのか。」

「これだけ近ければ、誰でも分かる。」

そんな事はないはずだ、とシユンは思つた。気配を消す技法は誰かに負けていると思わない。

それでもフウマが見破るのは、それだけこの少年の五感が研ぎ澄まされているからだ。

「お前、最近また感覚が鋭くなつたんじゃないのか。」

「お前の尾行の腕が落ちたんだろう。」

「あ、ちくしょ。お前俺をなめてるなー一年上は敬え!..」

フウマはやつてられないというよつて、シユンの声を無視して歩き出した。その進路を遮るようにシユンが枝から飛び降りる。

「待てつて。埋めてやろつぜつて言つてんじやん。」

死体を埋めるのは人間の習慣だ。シユンも特に意味を持つて言つているのではなかつた。ただ、人間の死体は人間流に葬るのが一番いいと思つたのだ。

「一人でやれよ。俺の知つたことじやない。」

フウマは何の温度もない声で言つた。そこに、悲しさや悼みの念は見出せなかつた。

シユンは今度は何も言い返さない。断られる事は言つ前からわかつていた。

ただ、時にはこの少年が心を持っている事を確かめたい。

どういう答えが返つてくれば、心の証明になるのか。それはシユンにも分からなかつた。

第一話 出会い

深い深い樹海があった。

その樹海は、はるか古代からその姿を変えず、季節によつて葉が紅葉する事もない。いつも同じ、深緑色だ。

その事から、この樹海は常緑の森と呼ばれていた。

この常緑の森に集落を築き、生活する者を【異形】と人間は呼ぶ。

朝からフウマは石造りの床を飛びように走っていた。彼が走ると、冷たい月光を凝縮したような銀髪がサラサラとなびく。父親から受け継いだその髪色は、沢山の人の中に紛れても一瞬で見つけることが出来る。異形の中でも珍しい色なのだ。

フウマの住む集落の家々は大概が石造りである。人間の生活圏と近い、森の入り口近辺に位置することには、昔は人間に焼き討ちを受け、ひどい損害を被った。石造りに変わつてからは火の被害は上っていない。

土に比べると、石の床は随分走りにくいくらいだ。母に呼ばれると、何故かいつも気が重かつた。心持ちは関係しているかもしれない。

母に呼ばれると、何故かいつも気が重かつた。

「入ります。」

広い一間に玉座が据えられている。村長が座る場所だ。七年前はフウマの父が座つていた。

今は母が座つている。

「フウマか。待つていた。」

男のようなしゃべり方で母は言った。サソリと言つ。髪は黒く、フウマと同じ金色の瞳。年齢不詳の肌は張りとつやで保たれている。村長になる前は女性の中にもたくましさのある笑い方や仕草が目立つたが、村長になつてからはどこか男らしい態度でいることが多い

つた。

死んだ父代わりになろうとしているのかかもしれない。

父の死は衝撃だった。

父があんな死に方をして、自分だけのうのうと生きていいられないと思つた。

死ぬ事が許されないと分かった時、何かが自分の中で変わったのだ。壊れた、というのかもしれない。心が頭に何も伝えてこなくなつた。それはフウマにとって、ひどく楽な事だつた。自分がやるべきは、一戦士として、課せられた人間の殺傷。それを全てにして、生きていけばいい。

父の跡を継いで村長になろうとは微塵も考えなかつた。母が村長に推されて就任した時も、何も思いはしなかつた。今のように少し、気が重くなつたのを感じただけだ。

それからのフウマは悲しいとも嬉しいとも思ったことはない。心はいつも空白で、ただ、思考とは隔たつた遠い場所で、時々もやもやした疼きを覚えるのみだ。

「さあ、報告を始めてくれ。」

「……何度も言つようですが、俺に言つ事はなにもありません。こんな報告会などやめにして下さい。」

村長になつたサソリにフウマは敬語しか使つた事がない。

「何もない、という事はないだろ。シユウに聞けば、お前は昨日、人間を六人も仕留めたそうじゃないか。何でもいい。些細な事でも報告してくれ。」

サソリは痛みに耐えるように目を細めて言つた。

フウマは変わらず、黙つたままだつた。

フウマが出て行つてから、サソリは深い溜息をつき、玉座の後ろのつい立に向かつて話しかけた。

「シユン、今日もあるの子を頼むよ。」

「……ウス。」

つい立からふわっと出でると、シユウはあつという間にフウマを

追つて出て行つた。フウマが生まれる前は村一速い足の持ち主だったのだ。

一人になると、サソリはぼんやりつい立を眺めた。

銀色の毛並みを持った獅子の絵が描かれている。獅子は鋭い目つきをしているようにも、優しい目をしているようにも見えた。自分の夫、ザンシャが村長になつた時に描かれたものだ。

ザンシャは本当にこの絵の獅子のような男だった。触ると針金のように固い、美しい銀色の髪が好きだった。どんな戦からも生き残る強さが好きだった。何より好きだったのは、鋭く優しい目だった。

生まれた息子は夫の銀色の髪と自分の金色の瞳を持った、明るい子供で。何も望まない位幸せな日々で。

その記憶は大事に心の奥にしまつてある。

「どうすればいい……？」

サソリは獅子に話しかけた。

「あたしはあるの子に何をしてやればいい……？」

獅子はいつまでも何も答えなかつた。

フウマは森の中を駆けていた。道などない。木が隙間なく立ちはだかる所をだ。

速度は普通の人間では田で追えない位である。

フウマはとにかく走る。走つてゐる間は、何も考えなくて良かつたからだ。

考えれば考えただけ頭の奥がざわつく。それは煩わしい。

「ちょ、ちょっと待て、休憩！一時休憩！――」

上から降つてきた声に、フウマは急停止した。

木の上からガサガサ葉を落としながらシュンが地面に降りてきた。肩で息をしている。

「お、お前ちよつとは俺を気遣つて歩け！追いつけなくなるだろ？

が。

「追いついてこなればいいだろ？。」

「そつは行くか。お前の護衛は村長の命令だぞ。」

フウマはシュンが傍に付いて離れないのを監視と呼ぶが、シュンは護衛と呼んでいる。

森には人間の斥候が時々潜んでいて、小規模な戦闘はほぼ毎日起きていた。

そのため、村を出て森を巡回する自警団が村の若者を中心に発足している。入れるのは二十歳を過ぎた者からで、十六歳のフウマがそれに加わっているのは異例の事だった。

フウマの強い希望と、村長の判断で、シュンを同行させるのを条件にフウマは森を巡回する役目を掴み取った。
また駆け出そうと足に力を込めたフウマを見て、シュンは慌てた。
まだ息が上っている。

その時、大声が樹海を突き抜けた。

「フウマ様！ フウマ様あーーー！」

その声の主はすぐわかった。フウマを様付けで呼ぶのは、自警団でただ一人だけだからだ。

「な、なんだよウォンの奴、大声出して。まさか襲撃か？」

普段、自警団がお互いを呼び合つ事はない。人間にかち会つた時でも各個撃破が基本だ。

尋常じゃない呼び声にシュンは緊張を走らせた。フウマはすでに突風のように走り出している。

「あ…つこり、速い！」

シュンも慌ててその後を追つた。

フウマとシュンはウォンの元に着いて言葉を失つた。

その場にはウォンと他二人、村から出てきている自警団の若者が三人いて、横たわる得たいの知れないものを取り囲んでいた。人間でない事は確かだ。何故なら、背中に大きな翼が生えているからだ。

ゴツゴツした表面で、黒っぽい色をしている。他にも腕の表面や首筋など、服から肌が見えている所にはうすすら透明な鱗らしいものが見える。

「まさか……よくしなぞく翼神族かよ。」

色素の薄い目を丸くしたまま、シュンはおそるおそる言つた。

樹海に住む異形の者にはおぼろ気な、民族の区別があつた。
例えばフウマ達のように、足が速く、牙や爪のある異形は犬神族。

肌に鱗があり、水に長く潜る者達は魚神族ぎょしんぞくと呼ばれている。

そして、異形の中でも存在が伝説化していた、翼が生えた者は翼神族と呼ばれていた。

何故伝説化していたかと言えば、その姿を実際に見た者はいないし、口から炎を吐くとか、睨まれると石化するとか、異形の者では化け物に思えるような能力を持つていると伝えられていたからである。

シュンも翼神族など、異形を怖がる人間が想像した者だと思っていた。今からその考えは一掃しなくてはならない。でなければ、目の前のこの物体は何だと呼べばいいのだ。

「まだ息はしているようですよ。」

ウォルは敬語でフウマに言った。ウォルはフウマが嫌がつても決して敬語をやめない。まだ、ウォルはフウマが村長を継ぐと信じているのだ。

自警団の中ではフウマの次に華奢で背の低い男で、どんな表情をしていても優しく見えてしまつような優男だった。顔とは別に怖いもの知らずな所があつて、他の三人が近付かないのにウォルは興味津々といった様子で翼の生えたその者を近くで眺め回している。

「どうしますかフウマ様。」

ウォルはフウマを自警団のリーダーとして扱う事が多かった。他の団員も特別不満は言つてこないのを見ると、黙認しているようだ。年少とは言え、フウマの能力の高さは群を抜く物がある。

フウマは考え込んでいるのか、黙つたままだ。

「息があんなら、一応助け……」

シュンの言葉が途中でぱつりと切れた。

言い切る前に、翼が激しく動いてむくりとその人物が起き上がったのだ。

その男はウォルに負けず劣らずの優男だつた。気弱そうなその表情は背中のごつい翼と正反対で、何となくチグハグした印象を受ける。瞳は焼けて焦げたような赤銅色で、蒼白な顔をしていた。ひどく疲労しているようだが、怪我はなかつた。

取り囮まれているのに驚いて、男は一瞬硬直したが、こぢらに敵意のないのを悟ると口を開いた。

「あ、あの、た、助けて、下さい。」

舌がもつれて、ひどくたどたどしい口調で男は続ける。

「この先の、大きな木の幹に、穴があつて、そこにルリ様が、…、女の子がいるはずです。どうか、その方を助けて下さい。」

ウォルとシュンは顔を見合させ、同時にフウマに視線を投げた。

「…何族の者だ。どうして森を彷徨つっていた？」

動じた様子もなく事務的な口調でフウマは言った。

明らかにフウマの方が年下なのだが、感情のない口調に気圧されたのか、少しオドオドした様子で男は答えた。

「ぼ、僕自身は翼神族と呼ばれる者…です。一昨日まで、ルリ様のご家族に仕えていましたが……」

そこまで言うと、男は一瞬言葉を忘れたようにうつむいた。

そして、囁くように小さな声で

「人間に襲われました。」

男はそれ以上口を開かなくなつた。

それどころか微動だにしないので、ウォルが不審に思つて覗き込むと、男はそのままの格好で氣を失つていた。

「あれが泣く子も黙る翼神族かよ。何か調子狂つぜ。」

フウマは何も答えない。

氣絶した男はウォルに任せて、フウマとシュンは木の幹にいるとう、女の子を捜していた。男の言つ情報が少なく、いまいち場所が分からぬ。

「俺はこの辺りの村は行きつくしたと思つてたが、まだまだこの森は広いな。」

樹海の広さは異形の者の関心事の一つだ。森の端から端までを歩き通す、と言つて旅に出た者で、帰つて来た者はいない。

今の所、この樹海がどこまで続いているか誰も知らないのだ。

「…氣を失うまで飛んだんだ。随分遠くからここまで来たんだろ?」

「フウマの物言いが、いつもより同情的な氣がして、シュンはフウマに田をやつた。

自分と重ね合わせてるのかもしれない。

「……女の子早く見つけてやろうぜ。」

シュンが言つと、珍しくフウマは頷いて見せた。

フウマが父親のザンシャと人間に捕らえられたのは六歳の時だった。次にフウマが森に戻つたのは一週間後。瀕死の傷を負つて、手にはザンシャの切り落とされた右腕を抱えていた。

それまで、フウマは無邪気に遊びまわる活発な子供で、誰もが次の村長として立派な青年への成長を疑つてなかつた。今は村のほとんどの者が腫れ物か何かに触るように、遠巻きから眺めているだけである。フウマはフウマで、笑わず、人と触れ合はず、人の殺し合ひに明け暮れる。

サソリはフウマが感情を失つたと思つてゐるが、シュンは違つと思う。

感情をなくしてなどいないので。ただ、深い憎しみに焼かれて、他の事に反応できなくなつただけだ。きっと今もフウマの心はあるの六歳のまま、時が止まつてゐる。

氣付かぬ間にぼんやり立ち尽くしていたらしい。

フウマはすでに背中が小さく見えるほど離れてゐる。

「あ、おい。一人でズンズン行くなよ。つづつか声かけるよ、足止まつてゐるつてさあ！」

シユンは慌てて走った。

するとフウマがハタツと止まつた。シユンの声に応じて止まつたとは考え難いので、シユンは何か見つけたな、と思った。追いついた先で、フウマの目線に目を落としたシユンが見たのは、木の幹から飛び出している小さな足だった。

直径一メートル位の大木の幹が、ぼっくり窟んで穴になつていた。そこに、黒髪が艶々して美しい華奢な少女が、安らかな表情で眠つていた。伏せた睫毛が長く、幼げだが、とても端正な顔付きをしているのがわかる。

「……いたな。」

「……ああ。」

ここまでさつきの翼神族の男が担ぎ、途中で運ぶのが困難になつて、ここに隠してとにかく集落を探したのだろう。右足が少し穴から出てきていた。その靴の装飾も、衣服もフウマ達には見た事のないものだつた。

姫、という格好ではないが、霧囲氣はさながら、木に封印された森の姫のようだ。

二人はその光景をしばらく、金縛りにあつたように見つめていた。何か神聖なものすら感じる姿だつた。

フウマが長い金縛りに気付いて首を小さく振つて、それを解いた。そつと近付いてみる。フウマは自分が息を潜めている事に気がついた。何故だろうと思つた。頭の遠い所で何かがムズムズと反応している。フウマは時々感じるこの感覚が嫌いだつた。

少女のか細い腕に触れてみる。

氷のように冷たくて一瞬たじろいたが、小さな呼吸音が少女の口元から漏れているのを耳にしてフウマは少しホッとした。

こんなに細いなら骨ばった感触が返ってくるかと思つていたが、実際は驚く程柔らかい。

抱え上げようと思つて、肩まで手を回すと、今まで触れた誰よりも細い、小さな体だった。

「……フウマ。何ぼんやりしてんだ？」

「……え？」

シュンの声でフウマは瞬きをした。

「や、え？じやなくて。」

そのままの格好でしばりくフウマは停止していたらしい。

「そういうえば、お前…、同じ年位の女の子に接するなんて初めてだよなあ？」

シュンは「ヤア」と気持ちの悪い笑い方をした。何が言いたい、とフウマは思つた。

「ビーだよ、可愛いお姫様を腕に抱いた気分は？」

さらじニヤニヤしながら肘で頭を小突いてくる。

何を言つているのだコイツは。殺しかねない程の強い目でフウマはシュンを睨み付けた。

シュンは思いのほか強烈な反応が返ってきたのに驚いて、一歩分くらい飛び退つた。

「……わ、悪い。」

「……村に戻るが。」

持ち上げた。

軽い。

それに驚いて、また一瞬動きが止まりかけたが、シュンに余計な事を言われるのが嫌で無理に体を動かした。

それでも、気分は悪かつた。

今まで感じた事がない程、頭の奥がザワザワ悲鳴を上げて、村に戻る間中、フウマはそれを振り払うのに夢中になつたのだった。

第一話 心の傷

温かい。

閉じた瞼の裏が、こんなに明るい。
日差しが自分に降り注いでいるのだ。
日差し？

という事は、今は昼なのだろうか。

最後の記憶を探つてみる。覚えている最後の場面はクルリの背中。
あの飲み込まれそうな闇夜に不気味な赤光の月が浮かんでいたのを見上げた時から先、記憶がなかつた。

クルリ。クルリはどうしたのか。

ルリは目を開けた。

石造りの壁が視界に飛び込む。

少し冷たい風が、フワフワしていた自分の意識を現実世界に固定した。

ルリはがっかりした木製のベッドに寝かされていた。
頭の方に日光の降り注ぐ大きな窓が、足を向けている方に部屋のドアがある。

ルリはゆっくり指を動かしてみた。

かじかんで力が入らなかつたのが嘘のように、滑らかに動く。上体を起こしてみる。

動ける。怪我も、病気もなく、動いている。

生き延びたのだ、私は。

その時、部屋の外で話し声が聞こえた。話すというより、一方的に一人が喋っている。

「だから、フウマよお。ふて腐れんなよ。いいじゃねえか、たまには殺し合いなんて物騒な事から離れて暮らしてみろよ。」

「乐しげな話し声だ。男の人らしかつた。

「じゃあな、フウマ。達者でやれよ。」

部屋に入る前に話しかけていた方の男は、部屋の前で離れていくようだった。

離れて行つたらしい後もしばらく、部屋には誰も入つて来なかつた。ドアの前で気配が止まつてゐる。

木造りのドアがギツといつて開いた。

ルリは少し目を見張つた。入つてきたのは、月の光のように見事な銀色の髪の少年だつたのだ。

クルリも父も母も黒髪だつた。もちろん自分も。それ以外の髪色は見た事がない。

銀髪の少年はうつむき加減で、こちらを見ていなかつた。ルリが目を開けている事も気付いていない。

無表情にも見えるが、ルリには悔しそうな顔に見えた。

「あなたが私を助けてくれたの？」

少年がハッと顔を上げた。

ルリは思わず笑つた。

すごい。もしかしてここは見た事もない色の目や髪の人物で溢れているかもしねれない。

金色の瞳が、訝しげに笑つてゐるルリを見つめ返した。

フウマは集落に戻ると、思いも寄らない事を命じられた。

拾つて来た異民族の世話をしろというのだ。

確かにフウマも、気にならない訳ではなかつた。

村の薬師によれば酷い疲労状態ではあるが、それ以外は健康だと言いう事だつた。

気にならない訳ではないが、だからと言つて、これ以上関わる気はなかつたといつたのに。

だといつたのに。

いきなり自分に笑顔を向けた少女は、嬉しそうに声を上げてベッドを飛び降りた。

「ねえ、ここは何族の村？すごい！石造りの家なんて初めて見たの

私！」

大きい窓に取り付くとまた、声を上げた。

「岩場ばかり！私が居た所は湖ばかりだつたよ。同じ樹海でも雰囲気が全然違うのね！」

少女の無邪気な様子に、フウマは言葉に詰まつた。

何なのだこの明るさは。

この少女は人間に襲われ、命からがら、ここに来たのではなかつたのか。

頭の奥がザワザワした。氣分が悪い。

「騒がしくするな。ここは村長の家だ。」

予想以上に自分の声が冷たい気がした。

少女は笑みを消してフウマを見つめている。田が大きかつた。真っ黒な瞳だ。

居心地が悪くなつて、フウマは田をそらした。

「ごめんなさい。怒らないで。」

「怒つてなんか、いない。」

そんな感情、自分にはないのだ。そう言い掛けてやめた。

確かに、自分は怒つている。

「お前は親を亡くしたはずだ。人間に殺されて。悲しくはないのか。

」

自分と似たような目に遭つたはずの少女が、こんなに明るく振舞えるのが、フウマには我慢ならなかつた。

もつと、悲しんで、苦しんで、憎むはずだ。自分と同じようになるはずだ。

十年経つた今もそんな風に笑えない自分が、弱く感じた。

少女は何も答えない。

フウマは田をそらしたままだったので、少女の表情すら分からぬ。

突然、体に柔らかい何かが触れた。

フウマが驚いて振り返ると、少女が自分に抱き付いていた。

「なつ……！」

とつたに声を出さうとして、息が続かなくなつた。

驚きのあまり息が吸えてなかつたのだ。

「よく分からぬけど、私はあなたを傷つけたのね。ごめんなさい。

」

少女はそつ囁くと、何事もなかつたように、また嬉しそうに笑つた。周りの空氣じと引き込むような鮮烈な笑みだつた。

フウマは燃えてるんじゃないかと思うほど体が熱いのを感じた。

「そうだ、私お礼を言つてなかつた！私の名前はルリです。助けてくれてありがとう！」

そう言つて、ルリと名乗つた少女はフウマを解放すると部屋を飛び出した。

「ねえ、クルリもこのお家のどこにいるの？」

廊下でルリが言つ。

フウマは半分以上聞いてなかつた。

抱き付かれている間、吸えなかつた息を補給するのに必死だつたらだつた。

シュンは開いた口がふさがらず、その様子を眺めていた。

ルリという少女は、楽しそうにあちこちに歩き回つてゐるし、クルリと呼ばれた翼神族の男は、幸せそうに赤銅色の目を細めて笑つてゐる。

はしゃぎ回る二人の後ろで、フウマがトボトボ（シュンにはそう見えた）歩いていた。

もの珍しそうに見つめてくる村の者達の目線に耐えている。彼らが珍しがつてゐるのは、異民族より、村を歩き回るフウマなのだ。実は犬神族の集落で異民族を見るのは、さほど珍しい事でない。

異形の中でも戦闘能力が高い犬神族は、村から村への貿易が盛んな所では、森を通る時の護衛として異民族に雇われたりする。しかし、フウマが村を歩くのはほとんどない。家にいるか、森にい

るかのどちらかなのだ。

隣の部屋で寝かされていたクルリは、夕方近くになつて目を覚ました。

傍に元気なルリを見ると泣いて喜んだ。

クルリの翼や鱗は見る影もなく消えうせていた。

ウォルによると、それは一瞬の出来事だつたらしい。

運ぶにも、本人の体の一倍ある翼をどう扱つたものか、しかもウォル以外の自警団の連中は怖がつて近付こうともしないのだ。とにかく、道を確保しようと、長い草を踏みならしたり、運ぶ時引っかかりそうな枝を切つたりして戻つてくると、翼も鱗もなくなつていたという。

こうなるとクルリは、ほとんど普通の人間のようだつた。

普通の人間と言えば、ルリもそつだつた。

犬神族はみな、爪や牙が長く鋭い。走る速さや跳躍力が普通の人間の何倍もあるといった特徴がある。ルリは民族的な特徴が何もなく、見た目では何族か特定できなかつた。

「村を見学してきたのか？」

「あ、はい！…えと…」

「シュンだ。村長直属の護衛をしている。よろしくな。」

ルリはニコッと微笑んだ。幼げだが、魅力的な笑みだつた。

「私はルリです。こつちはクルリ。お世話になつてます。」

「その事なんだが、今から村長が一人に会いたいと言つてる。大丈夫か？」

「はい！もちろんです。」

ルリとクルリが村長の家に駆けていくのを見届けて、シュンは問題のフウマを振り返つた。顔が何となく疲れている。

「ど、どうした、お前…。」

「俺はあるの女、嫌いだ。」

「……はあ？」

フウマが好き嫌いの話をするのは珍しい。

「あの女って、ルリちゃんかよ？」

名前を聞くのも嫌、というようになつてフウマは顔をしかめた。

シユン呆気に取られてそんなフウマの様子を眺めている。

「俺は、もう自警団に戻らせてもらひつ。村長の命令でも無理だ。」

「え……つ、おい待てよ！」

フウマは風のように駆け去つている。

シユンは反論する暇もなく、遠ざかる背中をポカソンと見ているしかなかつた。

「フウマ様、村にいらして良かったのに。」
ウォルは眉を八の字にして言った。

彼はさつきから、フウマの顔を見ればそればかり言つていて。
フウマもその度に無言になるので、会話が何も進まない。

樹海の夜は、周りが黒いと言つて良いほど暗かつた。

夜目が良い彼等は、そんな暗さでも松明一つ灯さずにいる。

「俺がここにいちゃ、悪いのか。」

フウマが初めて、言葉を返した。

「そんな事ないですけど……、だつてフウマ様はあの翼神族と女の子の事、任されたんでしょう？シユンさんが、だからフウマはしばらく自警には加わらないって言つてました。」

軽い舌打ちが聞こえてきた。

さすがにこの闇では表情の機微までは分からないが、明るみで見れば、憎々しげなフウマの表情が見れただろう。

「シユンさんはフウマ様を自警に加えるのに反対なんですよ。戦とはいえ殺し合いは、心の何が柔らかい所を削つてしまつから。」
フウマはウォルを見た。

フウマには、表情が見えているかもしないとウォルは思った。

夜目の効き具合も、フウマに敵う者はいない。

ウォルも自警に入つて二年経つ。人間は何人も殺した。

それでも、初めて殺した時の事は未だに覚えている。

「あの女、俺がどれだけ人を殺しているか知つたら、どんな顔をするだろうな…。」

囁くような声だったが、森の静けさと犬神族の聴覚の良さが手伝つて、ウォルの耳にフウマの独り言はしつかり届いた。

「…あの女って誰ですか？」

「だからル…」

言つてしまつたのに、口から出でてしまったのだろう。

闇の中でフウマは大いに慌てたようだつた。

ウォルには、フウマの慌てよう首を傾げるばかりである。

「ル…なんですか？」

「何でもない…！」

フウマの大声に、木に留まつていたらしい鳥が驚いて飛び去つた。

ウォルも腰を抜かすほど驚いている。

しかし、一番驚いているのは大声を出した本人らしい。口元を手で覆つている。

「あ、ああー、あのもしかして、あの女って、異民族の…」

先にクルリを担いで村に帰つていたウォルがその少女を見たのは、薬師を呼んで戻つてきた時に一瞬ベッドに寝かされていたのを見たのみである。

そのあとすぐ、自警に森へ戻つてしまつたのだ。

「その方にどう思われているのか、気になるんですか？」

「なつ…！？何でそうなる！？」

「だつて、自分でそう仰いましたよ。どうひひひ…言つたら、あの女どんな顔するかつて、ボソボソと。」

フウマは戸惑つて言葉を失つたようだ。

ウォルは思わず笑つた。

こんなに率直なフウマの感情に触れたのは久しぶりだ。

「…俺は、あの女が嫌いだ。だから……」

「……気になつた？」

「……。」

フウマの殺氣を感じ、ウォルは即行で「ごめんなさい。」と言つた。
これ以上こだわると、本当にやられかねない。

フウマはまだイライラしているようで、居たたまれなくなつたウォルはフウマから顔を背けた。

その時、ウォルの顔色が変わつた。

フウマがその異変に気付いて、素早くウォルの視線を追う。
表情が凍る。

村の方向。

煙。

ザツと血の気が引く。頭の中が真っ白になる。
一つだけ鮮やかに思い浮かんだ。

人間の襲撃。

言葉もなく一人は駆け出していた。

いつもより息が上がるのが早い体を、フウマは他人の物のように感じていた。

二人が村に辿り着いた時には、襲撃は止んでいた。

目に映るのは、炎よりも崩れた石積みが目立つた。

石造りの家の壁に大きな穴が、あちこちあいている。

炎が上っている家もあるが、大して激しい燃え方ではなくつていた。

ウォルが消火に当たつてゐる者の一人を捕まえてきた。

「何があつた？」

「わからねえ。急にドカンドカン音がしたんで外に出たら、黒くて
でかい鉄の玉が飛んで来ていやがつた。下敷きになつた間抜けはないが、壁を壊されてこのザマだ。」

どうやらこの男の把握する限りでは、死人も怪我人も出でないよう

だ。

「手伝おつ。」

ウォルが消火の作業に加わるひつとすると、男は少し首を振つて、フウマに向き直つた。

「ここはいい。それより、さつき村長の家から火が上つてたみたいなんだ。」

「村長の家が！？」

フウマは最後まで聞かず、走り出した。
はじめに母の顔が浮かんだ。

そして、あの異民族の黒髪が頭をかすめた。

村長の家は、炎は消されていたが、もうもうと黒煙が立ち昇つている。

サソリは家の前に立っていた。

サソリもフウマの顔を見つけ、少し泣きそうな顔になつた。

「フウマ！無事だったの。」

「村の襲撃を許すとは、面白も在りません。」

フウマが頭を下げて、再び上げた時には、サソリは村長の顔に戻つていた。

「いいや。それよりフウマ、ルリを見なかつたか？」

フウマの動きが一瞬止まつた。

「今、クルリとシュンが探し回つてゐるが、どこにも姿が見えないんだよ。少しの間だけ火が上つたから、家の外に出たとは思うが

……。」

「探します。」

フウマは迷う事なく黒煙の上る家に踏み込んだ。
後ろでサソリが何か叫んでいたが、構わなかつた。
外にはいない、という確信があつた。

もしいたら、一番に自分が見つけているはずなのだ。

フウマは村に着いた時から、自分の目が、あの闇より黒い漆黒の髪を探す事を止められなかつた。

何故かは分からぬ。

そんな事を考えるのは後で良い。

ただ今は、あの黒髪を田の届く所に入れて、この頭のイリつきを静めたかつた。

家の中は、黒煙ですぐ傍の自分の手すら見えない。

フウマは舌打ちを打つた。

これでは田が良くても悪くとも一緒だ。

人間の何百倍ある嗅覚も、今は焦げた木や布の臭いばかり鼻について、邪魔に感じるほどだ。

「　おい。」

フウマは手探りで進んでいく。

これまで生きてきた中で最大に五感を研ぎ澄ませる。

空気の動き、息遣い。

フウマは微かなその気配だけを頼りに進む。

「……おい！」

名は意地でも呼びたくなかった。親しみたくなかったからだ。部屋の入り口らしい所に行き当たつた。

ここだ、とフウマは思った。

位置的に村長の部屋だろう。

「そこにいるんだろう？返事をしろ！」

気配があるのに返事がない。

焦りがフウマの胸をふさいで行く。

不意に、色んな意地がどうでも良くなつた。

「返事をしろ、ルリ！」

闇雲に部屋を突き進むと、淀んでいた空気が動いて、黒煙が希薄になつた。

黒髪の少女がうずくまつてゐるのがはっきり見えた。

「ルリ！」

フウマはルリの細い腕を掴んで引き上げた。そして、ハツと息を呑む。

ルリは泣いていたのだ。

フウマの存在に今氣付いたように、ルリは目を見開いている。

「あ、あはは。フウマさんだ。あ、名前、聞いたんですよ村長様に。フウマさん、名乗ってくれないから……。」

すす汚れた顔をクシャクシャにして、ルリは笑った。そんな顔も魅力的に見えた。

「名前なんかいい。何をこんな所でうずくまつてゐる。早く外に……」

「ダメ！」

強い調子でルリは叫んだ。

「待たなきや……！待たなきやダメ……！」

「待つって何を……！」

フウマも強く聞き返そうとして、ピンときてしまつた。

すぐピンと来たのは、同じような傷をフウマも持つてゐるからかもしれない。

ルリが待つてゐるのは、父親と母親だ。

「……お前の家も、こいつやって襲われたんだな？」

ルリはぼんやりフウマを見返す。何の光もない黒い目。

「家が燃えて、お前は親に家から逃がされたんだな……？」

ルリは今、黒煙を見て、その時の記憶が蘇つたのだ。

連れて逃げようとするクルリに、ルリは何度も言つたのだろう。お母さんとお父さんを待たなきや、と。

フウマは腕を持つ力を強めた。

「ルリ。」

ルリの大きな目がゆきりと動いた。

もうその目には光が戻ってきていた。

ゆっくり微笑む。

「外に、行こう……。クルリにまた心配掛けちゃう。」

フウマは頷いた。

その時の自分の表情に違和感を感じて、フウマは頬に手を当てた。

間違いない。

自分は今、微笑んだのだ。

第三話 出兵

石を叩く、かん高い音が聞こえている。

叩く所が芯を捉えていれば、石でもこんなに澄んだ音を出す。

フウマは軽く汗を拭つた。

朝から石を積んで叩く事の繰り返しだ。

今朝、自警に向かうウォルを見送つてから、ずっとこの作業に掛かり付けである。

壊された石積みは、かなり多かった。

フウマは再び石を打ち込もうとして槌を振り上げたが、近付いてくる気配に顔を上げた。

よく焼いた鳥肉の香りがする。

昼食を運んできたらしい黒髪の少女は、フウマを見て微笑んだ。フウマは、表情を変えずに、しかし、ゆっくりと槌を置いた。

「… わてど。」

サソリは気を取り直して玉座に座りなおした。

あれだけの黒煙が上っていた家の中だったが、予想外に無事な家具が多かつた。

玉座も焦げてはいるが、座れないほどではない。

サソリが最も喜んだのは、獅子の絵のつい立が丸々無事だったことである。

すすを払つと、銀色の美しい毛並みを持つ獅子は、以前と変わらないように玉座の後ろで堂々とした佇まいを醸している。

目の前にはクルリが正座して、こっちを見上げていた。

「クルリ。お前は昨夜の襲撃に使われた武器を知つてるつて？」

いかにも氣弱そうな仕草の割りに、クルリの赤銅色の目はよく見るとまるで奥に炎が燃え上がっているようで、不敵だ。

外見は二十代後半といった所だが、ルリの両親に仕えていたというから、もっと年はいっているのかも知れない。

「は、はい。多分あれは、大砲と呼ばれる物だと思います。」

「たいほう？」

クルリは弱々しげに頷いた。

ルリ以外の者に接すると、いつもこの態度だ。人見知りが激しいのだろうか。

「鉄の弾丸を打ち出します。威力は矢の何倍もあって、他に鉄砲という物もあります。」

「てつぽうつてのは、どんなのだ？」

「大砲をもつと小さくして、弾丸の飛ぶ速度を上げたようなものです。至近距離で撃たれたら、鉄の鎧も貫きます。」

サソリには、鉄の鎧の耐久度がそもそも分からなかつたが、堅い物の例として引き合いに出したのだろう。

この樹海に鉄という鉱物は存在しない。人間の武器は鉄で作られているという認識があるだけである。

「……クルリ、あんたは何故そんな情報を知っていたんだ？」

つい立から突然、シユンが口を挟んだ。

シユンはフウマが森に出ない時は、常につい立の裏に張り付いて待機している。

サソリはそれでフウマが今日、自警に出ていない事を知ったのだ。クルリは、どう答えるか迷つた風に目を瞬かせていたが、やがて訥々と呟いた。

「……もう、亡くなりました。私を育ててくれた祖父が、教えてくれました。大昔の人間が使っていた武器は、もっと、複雑で殺傷力の高いものだつたのですよ。」

シユンもサソリも、顔を見合わせた。

「大昔つて……、あんたのじいさんだろ？どの位昔だ？」

「……翼神族の寿命は長いのです。とてもなく、長い。私は、人間の進化と退化の繰り返しをずっと記憶しているのです。」

伝説の一族、翼神族。

クルリの言葉に、何か言い知れないものを感じて、シュンも質問を続けられなかつた。

サソリにはもう一つ、気になることがあつた。

「クルリ、どうにも解せなかつた事が一つあるんだが。」

「はい。」

「犬神族が人間の襲撃に気が付かなかつた事など、この長い戦の歴史でも一度もありはしないんだが、今度の襲撃は石積みが壊れる音がするまで誰も気が付かなかつた。」

犬神族は嗅覚と聴覚に特化した一族である。

人間の臭い、足音、金属の擦れ合の音。気付く要素は幾らでもあつたはずだつた。

「それは…私にも分かりかねますが…。」

クルリは萎縮してうつむいた。

人間が気付かれず森に侵入する技を手に入れたのだとすれば、新しい武器よりもずっと一大事だ。

「……近いうち、大きな戦になるかもしれないな。」

サソリは苦々しい顔で呟いた。

「……。」

クルリは不安げにうつむいて、何も答えなかつた。

肉に食らいついていると、周りでフウマと同じように石積みの修復をしていた男達が、好奇の目でこちらを見守つているのが見えた。どこか、もつと離れた所で座ればよかつたとフウマは思った。いやしかし、離れていれば、それはそれで好き勝手に噂の種にされただろう。

「おいしい？」

周りの視線も構うことなく、ルリが聞いてくる。

相変わらず無邪氣で、何の屈託もない笑顔を見せていくが、もうこの笑顔がフウマをイラだたせる事はなかつた。

ルリの心の傷を見てしまつたからだろうか。

昨夜のルリを思い出すと、苛立つのとはまた別の感覚で、少し頭がうずいた。

「ねえ、フウマさんつてば。」

フウマがいつまで経つても答えないでの、ルリがもう一度言つ。

「…さん付けはやめる。」

フウマは肉の感想の代わりにそつ言つた。

シユンが、ルリはフウマと同じ十六歳だと言つていたのを思い出したのだ。

ルリは頷いて笑つた。

「じゃあ、私の事も呼び捨てで…ってフウマは初めて呼んでくれた時から呼び捨てだつたか。」「…つ！」

フウマは思わず、息を詰まらせた。

昨夜は夢中で気付いていなかつたが、自分がルリの名を必死で呼びまわつていたのを聞かれたと思うと、無性に恥かしくなつた。

一方ルリは、言われずとも慣れたらさん付けをやめるつもりだつたのか、すでに違和感なく呼んでいる。

さつきから一度も目を合わせないフウマの顔を覗き込む。覗き込むルリを避けるように、そろそろフウマは顔を背ける。

「…フウマはもしかして、照れ屋さんね？」

「…はあ！？別に照れてなんか…」「…

弾かれたように顔を上げる。

フウマは一瞬ルリと顔をあわせたが、気まずそつにすぐまた背けた。ルリはそんな様子のフウマを見て、変なの、と声を上げて笑つた。

凄まじく不機嫌なフウマを見て、シユンは一瞬、声を掛けるか躊躇

した。

フウマは、浴室に引つ込もうとした所だった。
広い村長の家の中でも、一番小さく玄関に近い部屋がフウマの部屋だ。

寝るためのベッドと着替えを置く小さな棚の一いつしか物はない、実際寝むのと着替える事にしか使われていない。

「こ、今度はどうしたお前……？」

フウマは少し皿を上げてシユンを見、また不機嫌そうに床を睨んだ。

「……俺は、あの女が嫌いだ！」

「……それ聞くの一回田だけど。」

しかも一回田より言い方に力がこもっている。

「噂のルリちゃんは？」

「…まだ石壁の所にいるだろ。」

「置いてきたんか。」

刺さるという表現がぴつたりな田線で、フウマはシユンを睨み付けた。

シユンは思わず引きつった笑いを浮かべる。

「何で俺がいちいちあいつを連れて帰らなきゃならない？！」

「え、いやー、ほらー…、何かルリちゃんフウマに懷いてるじやんか。」

一瞬、フウマの表情が固まった。

「おや？」とシユンは思った。

「…バカにしてくるの間違いだろ。……そうだ、あの女、完全に俺をからかってる。」

最後の方は独り言らしげ。ブツブツと呟きながら、しかしふウマは手持ち無沙汰なのか、やはりルリを迎えて行くの気なのか、玄関の方に歩き出した。

「お、おこ、フウマ……。」

シユンが追いかけて行こうとするが、突如、玄関口が騒がしくなった。

数人が何か言い争っているようだ。

一人は村長の家に何人かいる従者の者で、もう一人は聴覚のいい犬神族には耳障りなほどの大声の持ち主だった。

「失礼するぞ、サソリ殿！」

地鳴りのような腹に響く低い声と共に、大男がかがみ込むように家へ入ってきた。

「じゅうしんぞくおさ 獣神族長ガブ殿！」

大男を見たシユンが声を上げた。

ガブはシユンとフウマに軽く目礼し、のつしのつしと玉座の部屋に歩いて行つた。

ガブは床にドシンと座り込むと、挑戦的な目線でサソリを見上げた。年は四十辺りだつたはずだが、腕や脚の筋肉は丸太のように太く、日に焼けた赤い顔をしている。この薄暗い森でこんなに日焼けをするのは、彼等、獣神族が好んで岩場に住んでいるからだ。体は普通の人間より一周り程も大きく、鈍重だが、非常な怪力を持つ一族である。

しかし彼等の最大の特徴は、肉体的なものよりも、精神的な所にあるとサソリは思つてゐる。

飽くなき闘争心。

とにかく好戦的なのだ。

「聞いたぞ。昨夜人間の襲撃で、大きな被害があつたと。」

森の入り口に村がある犬神族は、各一族へ人間の情報を伝令する事が義務付けられている。

昔々の一族会議で決まつた事だが、この会議で決まつた事は逆らえない。

「……大きな被害と言つても、死人は一人も出していない。」

「そこだ、サソリ殿。貴君の甘い所は。」

ガブは蓄えられた立派な顎鬚を撫でた。

「死人が出なければいいという問題ではない。報復攻撃を行つべき

だ。獣神族からも戦士を命流させよう。なんなら、わし等だけでもいい。人間に身の程を知らせてくれる！」

クルリはガブから逃げるように端に移動している。

シユンとフウマも開け放たれたままの扉から、中の様子を見ていた。いつもなら、この剣幕を押さえるのに四苦八苦する所だが、今回は確かに攻撃を行うべきかもしかないとサソリは思った。

「確かにここで攻撃しないと人間に勢いづかれるかもしだぬ。新しい武器も実際ぶつかつてみなれば対策の立てようがない。」

サソリは自分に納得させるように頷いた。

「決まりだ、ガブ殿。犬神族は報復攻撃を行う。獣神族の援助、痛みに入る。」

ガブは満足気に笑った。

「そう言つてくれると信じていたぞ。村のすぐ近くまで、二三百名の戦士を連れて来た。」

すでに三百名も。

もしサソリが断つても、その三百名で襲撃をするつもりだったに違いない。

早い方が効果的だろう。

戦士の編成を今夜にも始めようと、サソリは思った。

村長の家の二階からは、村の全体が見渡せる。

ルリとクルリは、最初に寝かされていた二階の部屋をそのままあてがわれていた。

客が来る機会が多いのだろう。密間として空室になつてている部屋はまだまだ沢山ある。

夕方になると、村長の家の前には屈強な体つきの若者が続々と集まつてきていた。

報復攻撃が始まるのだという。

ルリの暮らした地では、農耕が盛んで、収穫期は実りに感謝し、種

植えの時期には豊作を祈り、

村の中で子が生まれれば、幸多き人生を神に祈願し、新しく結ばれた夫婦があれば、切れることのない愛を誓い合わせた。

そこでは人間も異形もなく、戦などお伽話のように思っていたものだ。

あの夜、ルリの村が襲撃を受けたことは、まさに想像もつかない事だった。

「ルリ様、私もようやくこの村の事がわかつてきました。ここは人間との戦の最前線なのですね。」

クルリの顔は暗かった。

危険な地にルリを運んでしまったという自責の念に駆られているのだろう。

「これからこの村の人たちは人間の里に攻め入るの？」

獣神族との対談の様子を聞いたルリはそう尋ねた。

クルリは頷く。

やはり、お伽話のように感じられた。

「彼等は何故戦うの、クルリ。」

「……。」

クルリは答えない。

どう答えるても、ルリの満足できる回答はないと思つた。

「私には、わからないよ。」

人間と異形の何が違うのだろう。

力に差があるうと、姿が違かるうと、同じように子を成し、生活するのに。

戦に、何の意味があるのでう。

お伽話に思えるほどの知識では、何もわからない、とルリは思った。

「ねえ、クルリ。」

クルリは顔を上げてルリを見た。

陽炎を封じ込めたような赤銅色の瞳にルリの黒髪が映る。

「私も参加できないかなあ。戦。」

クルリは息が止まつたよつた顔をした。
日が落ちていく。

じきに、兵の編成が始まるだろ？

真つ暗な夜だつた。

新月だ。

その濃い闇を松明で照らし、編成は行われていた。
大規模な編成を行うのは村長になつて初めてのことだつた。
サソリは少し緊張して、玉座に座つていた。

百名連れて行く。

志願してきた戦士の一人一人を見て選ぶのだ。

先頭を犬神族が進み、後ろから獣神族がついて来る形を取る。

前の犬神族は、人間の統制を崩し、攪乱する。

浮き足立つた人間を後ろからやつて来た獣神族が踏み潰すのだ。
なるべく身が軽い、足の速いものを選抜しようとサソリは思った。
隣でシユンが緊張感なく、くわあとあぐびを漏らしている。

シユンとフウマは戦場で直接百名を指揮する者として、編成に組み入れられていた。

二人してサソリのすぐ後ろに控えて編成に立ち会つている。

「あいよ、次の奴いらつしゃい。」

「……おい、シユン。もう少し緊張感を持つて取次ぎの役をしてくれないか。」

面接を終えた者と扉の外で順番を待つてゐる者を入れ替える役はシユンがやつてゐる。

「村長、誰も彼も緊張してたら、間が持たないぜ。いーのいーの、俺くらいのが一番。」

サソリはフツと口元に笑みを浮かべた。

確かにその通りだらう。

シユンのようなタイプが戦場では一番強いのだ。

シュンが扉を開け、次の者を呼び込もうとして、素つ頓狂な声を上げた。

「えっ！？何してんのルリちゃん！」

ルリという言葉に、今まで人形のようになに動かなかつたフウマが目をむいた。

立ち尽くしているシュンの横をヒョイとすり抜けて、小さい人影が部屋に滑り込んできた。

「こーんばんわー！」

元気一杯にルリは挨拶した。その朗らかな声とは裏腹に、場が凍りつく。

そつと、その後ろから、クルリのヒョロリとした細い体躯がルリを追いかけ部屋に入ってきた。

サソリが呆気に取られて、口を開けようとすると、それよりも先にフウマが噛み付くように叫んだ。

「何しに来た。村長は兵の編成で忙しいんだ、くだらない用なら放り出す！」

サソリはフウマの剣幕にも呆気に取られて、両者を交互に眺めた。

悪びれもせずルリは笑う。

「まあまあ、そう怒らないでよ、照れ屋さんのフウマ。」

「おっ…、お前、まだ言つか！」

顔を真っ赤にして叫ぶ。

本人は気付いていないが、その反応は照れ屋そのものだ。

「いや、でもルリちゃん、マジでダメだつて。今晚中に編成終わらせて、明日の早朝には出兵すんだからさ。」

シュンが扉を開けたまま言う。

ルリはシュンに微笑み、サソリへ顔を向けた。

「サソリ様。どうか、私達も連れて行ってください。それを、頼みにまいました。」

ペコりと頭を下げる。

犬神族の三人はほぼ同時に言った。

「はあああ？」

予想外とはこの事だらう。

ルリが兵に志願してきたのもそつだが、さらに予想しなかったのは、ルリの戦闘能力の高さである。ルリには爪も牙もないが、代わりに透明な刃がついた短剣を踊るような動きで使う。

「それなりに戦えるのはわかつた。だが、兵として扱えるレベルじゃない。」

サソリは言った。

「わかつてます。でも、兵としてではなく、兵糧の番でも、雑用係でも、やる事一杯ありますよね？」

確かにそうだった。

野営での料理を作る者、薬師など、戦わない者も数人、従軍させるつもりだった。

「お前がそつまでして報復に加わりたいのは、人間への恨みを晴らすためか？」

サソリの問いに、フウマの金色の瞳が揺れた。ルリは目を丸くしてサソリを見返した。

思つてもみなかつたという風だ。

「私、人間を恨んだことありませんよ？」

サソリが口を開く前に、またしてもフウマが先にルリに突つかかつた。

「嘘だ！じゃあ、何故従軍を望む？親を殺されたからだらうが！」

必要以上に声を荒上げる。

透き通った漆黒の瞳が、フウマを見つめた。

フウマは気まずい気持ちになつて、目を伏せた。

この目には何故か敵意が挫けるのだ。

「フウマは人間を憎んでいるの。」

そうだ、当たり前だ。フウマはそう叫びたかったが、うまく口が動

かなかつた。

「それに、憎む事が良くない事だとも思つているのね。」

今度はサソリが目を丸くてルリを見返す番だった。

「思つてない。人間は敵だ。敵を憎んで何が悪い？俺は今まで何人も、憎むまま人間を殺してきた！」

フウマが低い声で言つ。

目を上げると、ルリが悲しそうに眉を寄せているのが見えた。初めて見る表情だった。

昨夜、泣いていた時でさえ、笑い泣きだったのだ。何か自嘲的な笑みが顔に浮かびそうになる。

同情されているのか、俺は。

急激に、頭が悲鳴を上げるほどザワツと疼いた。この女に同情されるのは耐えられない。

「お、おいフウマ！」

フウマは玉座の間から走り出していた。廊下に並んでいた兵が、一瞬ざわついたが、すぐに沈黙が降つて來た。

ルリは少し慌てて、フウマを追つか迷つたように、サソリと、フウマが出て行った方向とに視線を彷徨わせている。

「追つてくれ、ルリ。」

サソリが言つた。

ルリはすぐ頷くと、

「余計な事を言つて」「めんなさい！従軍はやつぱり諦め……」

「いや。」

ルリの言葉を遮る。

「ついて来てくれないか、ルリ。」

ルリは一瞬、逡巡したようだ。

フウマとこんな風に確執があつては、戦いに差し支えるのではと思ったのだ。

しかし、それは少しの間で、ルリは深く頷いた。

サツと踵を返す。

「この闇じゃ、もうどこ行つたか、わかんねえぞ。俺が匂いを辿つてつてやるよ。」

シコンがルリの前を先行して走り出て行つた。

また、沈黙が降りる。

部屋にはクルリとサソリだけが残つた。

「従軍を許した私を憎むか、クルリ。」

クルリは弱々しく首を横に振つた。

「感謝いたします。ルリ様の希望を通してくださつて。」

慣れている、というような反応だ。

ルリの無茶は今に始まつた事ではないのかもしない。

サソリは手を細めた。

私はフウマの事を、何も理解していなかつたのではないか。ふとそう思う。

憎しみの奥にフウマが何を思つてゐるかなど、サソリは考へた事もなかつた。

自分には、あんな風にフウマの感情を揺さぶる事は出来ない。

「気になさる事は、何も在りません。」

サソリはハツとしてクルリを見た。

「サソリ様は十分、フウマ様に母親として認められております。ただ、今のフウマ様に必要なのは母であるサソリ様の言葉でなく、同じ境遇のルリ様の言葉だったというだけなのです。」

二十代後半の外見の青年は、笑うと、年月の重みのような深さを感じさせた。

そのせいか、サソリはその言葉に素直に頷く事が出来た。

「今夜中に編成を終わらせなくてはならないのでしょうか？私が取次ぎ役をしましょうか。」

「頼む。」

次の兵がクルリに通されて部屋に入つてくる。

今は村長として編成に集中しようとサソリは思った。

冷たい石の感触が肌に触れると、ようやく頭の疼きが治まった。

新月の夜。

人間の襲撃に備え、松明も燃やさない村は、頭で想像する闇より、もっと濃い黒で覆われている。

昼間、自分で積んだ石壁にもたれると、フウマはぼんやり空を見た。驚く程、気持ちが落ち着いて、フウマは気がついた。
自分はこういう闇が嫌いじゃない。

ルリの黒髪のような闇より黒い色。

「フウマ。」

目の端に松明の炎と、それに照らされるルリの顔が見えた。
この闇で嗅覚も夜目も利かないルリが一人で来れる訳がない。どこかにシヨンもいるのだろう。

少しずつまた、頭が疼くのをフウマはじっと耐えた。

「私は一回も命を助けてもらつたのに、私は同じ回数、あなたを傷つけてる。」めんなさ……

「謝るな。」

フウマはルリの言葉を力なく遮った。力加減を変えるとすぐ怒声に変わりそうだったからだ。

「余計、惨めな気分になる。」

「…惨め？」

ルリはフウマの向かい側に積まれた石の上に腰掛けた。

「何故、惨めになるの。」

フウマは答えないともりでいた。

しかし、口が勝手にしゃべりだしていた。

「お前が、俺と違うから。」

何を言い出しているのか自分でもわからなかつたが、止まらない。

「俺は、気絶したお前を見つけた時、俺と同じだと思った。昔、俺も人間に親を殺され、命からがら逃げて來た。だから、同じだと。」

ルリは真剣な眼差しでじつと耳を澄ましている。

「でも、お前は俺とは全然違う。それが、俺を惨めにする。」

「何故、それが惨めなの？」

フウマは力を入れて口を開じようとした。しかし、どこにも力は入らず、ただ頭が痛くなつただけだつた。

「お前の行動全部が。お前が泣いても、怒つても、惨めだ。」

フウマは笑いたくなつた。随分、酷いことを言つている。

他人が言つた言葉のように、それがわかる。

「お前が笑うから。お前が人間を憎まないから。俺は惨めだ。」

視界が歪んでいるのに、フウマは初めて気がついた。

「俺には、それが出来ないから、苦しくて惨めだ。」

頬に指が触れた感触があつた。

細くて小さな指はそつと涙をなぞつて、背中に回された。力が入らない。

ルリに抱きしめられて、自分が石のよつに冷たくなつていたのがわかつた。

「でも、フウマ。昔は知らないけれど、少なくとも今、」

ルリの声が耳のすぐ近くに聞こえている。

「あなたは怒るし。そうよ、私まだここに来て少ししか経つてないのに、何度もあなたを怒らせたことか。」

クスクス笑う声がする。声以前に体の振動で笑つているのがわかる。

「それに、泣いてるわフウマ。ちゃんと出来る。」

「でも俺は、これからも人間を憎み続ける。人間を殺す事で喜ぶ俺を、お前は」

軽蔑するだらう。

そこまで言いかけて、フウマは惨めだと思つ理由をよひやく、完全に理解した。

俺は、そういう自分を今まで、心底軽蔑していたのだ。

ルリのよつに生きたかった。何でも良いことで笑い、素直に泣いて憎むことを知らない。

そういう風に生きたかった。

だからこの少女を嫌い、顔を背け、それでも惹かれていたのだ。

「私がフウマを軽蔑するわけ、ないじゃない。今までも、これからも。」

「でも」

「フウマは私が人間を殺したら軽蔑する？」

ルリが人を殺すなど、想像できなかつたが、それでもフウマは軽蔑しない、と思つた。

殺しじゃなくとも、他のどんな事でも、ルリに対して軽蔑する気は起きないと思つた。

何をしても、それはルリなのだ。

「フウマはフウマだもの。これからもずっと、フウマがフウマだつて事は変わらないもの。」

「……よくわからぬ。」

フウマは口を閉じた。

「でも、それを聞けて、良かつた気がする。」

頭の中が、今までで一番晴れている。

石のようだった体は、すっかり温まって、腕に力が入るようになつたが、フウマはルリを振りほどかなかつた。

第四話 敗戦

サソリは信じられない気持ちでその光景を見ていた。

次々に倒れていくのは、自分で選抜した兵達だ。

どうしてこんな事になつた？

サソリは深い沼に引きずり込まれるような脱力感に陥つて行つた。完全な敗北だつた。

村を出て三日で森を抜けた。

犬神族の足であればもつと早く着いたはずなのだが、獣神族に合わせての進軍ではこれが精一杯だつた。

森を抜けるとすぐに、赤茶の乾いた荒野が広がつている。

兵の多くはそれに大きな衝撃を受けたようだつた。

この広々とした乾いた大地は、昔は森の一部だが、戦争の最中、人間に徹底的に焼き払われたのである。

未だに木の芽一つ出ない、不毛の地となつてしまつた哀れな地帯なのだ。

今夜の野営が攻める前の最後のキャンプになりそつだつた。ここから先に進むのは兵のみで、軍医や兵糧を守る者達はここで兵の帰還を待つ事になる。

医師の診察用に立てられたテント内で、薬師として従軍したガランはゆつくりと、薬草を配合する作業をしていた。

真っ白な白髪をワシャワシャとかき混ぜるようにかく。手ではなく、尻尾で。

ガランは袁神族だつた。

袁神族は身体的には手足が長いのと、尻尾が生えているのが特徴である。犬神族より戦闘力は劣るが、爪や牙は鋭い。、顔の肌が赤く、長く駆ける才はないが、身のこなしの良さは犬神族と同等かそれ以

上だ。

手先の器用な者が多いので、服や装飾品を作つて売るなど、森の物流を担つてゐる一族である。

ガランが犬神族の村に来る事になつたのは、当時の村長と親しかつた薬師の父が一家ともども引き連れて犬神族の村に移り住んだのがきっかけだった。

父も母も故郷へ帰ることなく犬神族の地に還つた。自分もそろそろ、両親と同じ命運を辿るだろう、とガランはこの白髪頭を見ると思う。ガランはこの従軍はもっと忙しくなると思っていたが、優秀な助手の参入で、心配していたほどではなかつた。

その助手とは、まだ村長の息子と同い年だという、何故従軍を許されたのかよく分からぬが、ルリという黒髪の美しい少女だつた。薬草を漬して一日中煮詰めたり、擦つては乾燥させ、練つては煎つては、と地道に時間のかかる事ばかり、文句どころか、常に笑顔でそれをやつてゐる。

しかもそういう作業に慣れているようだ。ガランが薬師の経験があるのか、と聞くと、父親が薬師のような事をしていく、手伝いをよくしていたのだといふ。

何でも、元いた村は人間に焼き滅ぼされて、はるばる犬神族の村に逃げ延びたのだそうだ。

あまりに屈託もなくその話をするルリに、ガランは最初冗談かと思つたほどだが、村長付きの護衛シユンから聞けば眞実であるらしい。

「ガラン先生、この薬、ドリアムさんのですか？」

「ああ、うん。」

ガランは苦笑した。またドリアムが來てゐるか。

この獣神族にしては体格の小さめなドリアムという青年は、余程ここが気に入ったのか野営の間中このテントに遊びに来ている。

「はい、ドリアムさん。」

丸い顔をクシヤつとさらに丸めるように笑つたドリアムは、ガラン

ヒルリに丁寧にお辞儀した。

「ありがとう。この薬ほんとよく効くよ。俺は緊張するともう、絶対に眠れなくて寝不足になるけど、今回は薬のおかげでぐっすり眠れる。」

患者は大体若い戦士で、症状はみな、緊張による不眠や腹下しだつた。

ただでさえ今回進軍する兵は初陣である者ばかりなのだ。

薬をもらいに来る者は多かつた。

「薬を飲みすぎるなよ。動きが鈍るからな。もうそろそろ隔絶の壁が近い。」

ガランは長い尻尾で遠くにあつた薬草を引き寄せて、混ぜ合わせていた薬に加えながら言つた。

「隔絶の壁？」

ルリとドリアムが同時に聞いた。

「…なんだ、この呼び名を知らないか。二人はまだ若いものな。：このまま真っ直ぐ進めば、人間が森に対する防衛線として築いた、背の高い石の壁が見えて来るんだよ。そこを、わしのような老人は隔絶の壁と呼んだりする。もう何百年と崩されてない、人間と異形の世界を隔絶する壁なのだよ。」

もつと戦火が激しく燃え盛つていた時代は、そこを巡つて毎日何百人と死んでいたという。

隔絶の壁は厚く、異形の力を持つてしても崩れる事がなかつた。ドリアムは少し身震いしたようだつた。

「ドリアム、お前は獣神族にしては随分大人しい性格なのだな。わしはてつきりガブのような奴ばかりかと思っていたぞ。」

笑つてガランは獣神族長ガブの怒つた時の凄まじい形相を真似してみせた。

しかし、ドリアムは笑うどころか元気なくつむいた。

獣神族にしては小柄といつても、ガランやルリに比べれば一周りくらい大きい体が、少し縮まつたようだ。

「そうだ。俺は臆病者なんだ。皆にもそういうて馬鹿にされる。」「いや…、そんなつもりで言つたんじゃないんだが。…悪かった。」

ガランは白い毛の混じった眉を寄せた。

薄々、雰囲気は感じていたが、獣神族内では、彼は孤立しているらしい。こう大人しいだけで、獣神族からは軽蔑の元なのだ。

「いや、いいんだよ。本当の事だ。俺は戦うのが怖い。今度の進軍だって、集落に残つて臆病とからかわれるのが嫌で加わつたようなもんだ。」

ルリは黒曜石のように黒く光る目をドリアムに向けて、じつと黙つていた。

「ガラン先生、ルリ。俺、ここにいると故郷にいる時よりずっと居心地良く過ごせるよ。二人とも優しいもんな。」
ドリアムは朗らかに笑つた。

「…冷えますよ、火に当たつてください。」

クルリはぼんやり立つてゐるフウマに言つた。

彼は声をかけられたのに驚いてクルリを見、「…ああ。」と呟いた。

クルリは夕飯の調理のために焚いた火の番をしている所だった。

「入らないんですか、テント。」

クルリはさりげなく聞いた。

クルリの焚いた焚き火のすぐ近くに医務用に立てられたテントがある。

ルリはそこにいるはずだった。

フウマは沈黙したままだ。無視されたのかと思つたが、しばらくして答へが返ってきた。

「…中に患者がいるようだから。」

クルリは意外に思つてフウマを見た。

ルリに会いに来た事を、彼は素直に認めた事になる。

クルリの顔に微笑みが浮かんだ。

彼はもう気が付いたのだろう。自分の気持ちに。

ルリに好意を持っているという事に。

その時、テントからのそりと誰か出て來た。

獣神族の男だつた。

「あの男、毎晩來てるな。」

フウマがそう言つたので、クルリも男の顔を確認してみたが、どうだつたかよくわからなかつた。テントは人の出入りが激しいのだ。いちいち顔を覚えていない。

クルリは思わず意地悪つぽく言つていた。

「心配ですか。ルリ様に氣があるのかもしないし。」

フウマは心なしか渋い顔をしてクルリを見返した。
このクルリという男、人見知りが激しいが、近頃は大分慣れしてきたらしく本来の性格が見えてきた感じがする。

「最初に言つておこうと思いますが、フウマ様。今ルリ様のご両親代わりが出来るのは私しかいません。その責務を重く受け止め、果たして行く上で、フウマ様の動向を注意深く拝見させて頂こうと思ひます。」

クルリはにこやかに微笑んで言つた。

このセリフを年頃の娘を持つた親父風に言えば、うちの娘に下手な事したらぶつ飛ばすぞこの野郎、と言つた所だらうか。

「……。」

フウマはしばらぐ絶句してクルリを眺めていた。

隔絶の壁は、名に相応しい、巨大な石壁だつた。

獣神族の一倍はある高さに、横は小さな集落なら丸ごと包み込めそうなほど長く続いている。

一体どれ程の労力を上げて築き上げたのだろう。

隔絶の壁前に、人間が隊列を組んで待ち構えていた。
その数、ざつと千人はいそうだつた。
数はいつも人間が上回る。

その目と鼻の先に、異形の者も隊を敷いて今か今かと突撃の合図を待っていた。

ガランやルリのいる陣ははるか後方である。ドリアムはそつと振り返った。

陣の中心に高い棒が据えられていて、その先端に赤い旗が掲げられている。

もし万が一にも敗走したら、その旗を日印に逃げ込むのである。遠く、乾いた起伏の激しい大地に、ぽつんと見える赤いのがそれだとドリアムは思った。

それだけで何となく心が落ち着いた。

「おい、仕掛ける前から逃げ出すんじゃねえぞ。」

「いや、逃げてもらつた方が俺達の邪魔にならなくて助かるぜ。」

後ろを振り返つているドリアムに、左右に並ぶ獣神族兵が口々に罵り立てた。

唇を噛んでドリアムはうつむいた。

ドリアムは両親や兄弟にまで臆病である事を罵られて生きてきた。自分の何分の一の大きさでしかない鹿を一頭狩るのに、冷や汗でビツショリになる。

戦のための鍛錬で牙の使い方を習つと、恐ろしくて夜も眠れない。獣神族たるに必要なステータスは唯一。

勇猛果敢であること。

逆に言えば、そうでなければ獣神族として生きる資格も剥奪される。ドリアムは獣神族の中で生きてきて、一度も心が安らかになつた事がなかつた。

何の心配もなく、初めて心から笑つたのは、獣神族の集落を遠く離れた、陣中の医務用テントの中だつたのだ。

笑顔が魅力的で、笑いかけられるといこちらも笑顔になつてしまふルリや、いつも面白い話を老人独特の穏やかな口調で話してくれるガランが、ドリアムは大好きだつた。

罵つていた兵が不意に口をつぐんだので、ドリアムが顔を上げると、

犬神族の村長サソリが隊列の先頭に歩み出た所だった。

この戦場でただ一人の女性であるため、その姿はかなり目立つ。

さらにその後ろから背の高い茶髪の男と、小柄な銀髪の少年が付いて行く。

ドリアムは戦場にどうしてあんな幼い少年を連れて行くのかと驚愕して見守っていた。

サソリが高々と右手を上げる。

それが合図だった。

一斉に犬神族百名が風のように飛び出した。

ドリアムは鳥肌が立つた。

一人一人が矢のよう人に間の隊列に突っ込んでいく。

これが犬神族の戦い方。

獣神族とは全く異なるものだった。

目で追いつかないほどの早い動きで相手を攪乱し、石にすら突き刺さる鋭く頑丈な爪を見舞う。

その様はまるで踊るようだ。一舞いする度に血煙が吹く。

千人の人垣が、たつた百人に乱されていく。

その時、凄まじい雄叫びが戦場を貫いた。

獣神族長、ガブが吠えたのだ。

それが、獣神族突撃の合図だった。

「さつさと進め！」

硬直して動けないでいたドリアムの後ろにいた兵が叫んだ。
しかし、ドリアムはそれでも動けない。

「ほつとけそんな奴！」

誰かがそう言い、ドリアムの後ろの兵は次々にドリアムを突き飛ばして人間の隊列に突き進んでいく。

獣神族の戦いは、犬神族とは間逆の力勝負だった。

獣神族にとって、人間が放つ矢の一、二本は刺さつてもどうという事はない。

猛進して行き、手当たり次第その丸太のような腕で相手をなぎ倒し、

牙で肉を骨を噛み碎く。

不気味に静かだつた戦場は、獣神族の参入で、一気に怒号と唸り声で一杯になつた。

ドリアムは、震えながらその様を見ているしか出来なかつた。

獣神族が隔絶の壁に体当たりを始めた。

一発二発とやるうちは、揺らぎもしなかつたが、体当たりをする人数が五、六〇名程になると、壁はだんだん、大きく揺らぐよつとなつていつた。

十度も当たつた頃だらうか。隔絶の壁が恐ろしい音を立てるのを聞いた。

「あつ！」

ドリアムは思わず声を上げた。

少し離れたドリアムの目にも、壁に大きな亀裂が生じたのが見えたのだ。

もう一押しで、壁は崩れる。

嬉しさでドリアムの目は思わず、ガランやルリのいる陣のほうに向かつた。

しかし、思いも寄らないものが目に飛び込んできた。

土煙が上つている。

赤茶色の大地を疾走する、おびただしい数の人間の騎馬隊が一直線に森へ向かっているではないか。

森の前には陣がある。

赤旗は土煙で全く見えない。

叫んだ。

ドリアムの頭は真っ白になつた。

かなり経つてから、自分が陣に向かつてずっと走っていた事に気がついた。

鈍足な獣神族は我を忘れると、驚く程俊足になると誰かに聞いたが、自分が今きつとそうかもしない。

ドリアムは思わず泣きそうになつた。

これを言つていたのはガランだつた事を思い出したからだつた。

サソリは違和感をずっと消せずにいた。

戦況はほぼ一方的にこちらが押している。

しかし、どうにもおかしい。

手応えがないのだ。

「村長！」

「！シユンか。」

剣や槍をヒョイヒョイ避けながらシユンがサソリのすぐ横にまでやつて來た。

「こいつら戦う氣あんのか？なんつつか抵抗がないっていうかさあ。」

シユンが自分の思つているのと同じ事を言つた。

それでサソリは自分が思つているだけでないことを理解した。

「俺も戦争としてまともに人間とぶつかったのは初めてで、よくわからんねえけど、今の感じはどうも良くねえと思……」

突然ズシンッと地響きがして、一人が顔を上げると、ガブが隔絶の壁に体当たりをかましているのだった。
また違和感が増えた。

長年、隔絶の壁と呼ばれた、戦争の象徴であるこの壁に簡単に攻撃を許すとは。

それとも、これが人間の実力なのか。
嫌な予感がした。

ついに壁にビビが入つた時だつた。

ガブにも負けない凄まじい雄叫びが戦場を駆け抜けた。
「？！」

誰だ？何を知らせる雄叫びだ？

サソリは声の主を探した。戦場ではない。少し離れた位置から聞こえた。

声の主は見つけられなかつたが、代わりのものがサソリの目を釘付けにした。

「全軍撤退！！」

次の瞬間サソリは大声で叫んでいた。

事情の飲み込めない異形の兵達に動搖が走る。

「この人間どもは囮だ！各自、追撃を撒きつつ即刻、陣に帰還せよ！」

サソリの目線を追つたシユンの目に、遠くの大地で大きな土煙が上つているのが見えた。

大勢が移動している証拠だ。

真っ直ぐ陣へ、そして森へ向かっている。

異形の者が撤退を開始した途端、人間の猛追が始まった。

サソリは大きく舌打ちを打つた。

全て作戦だつたのだ。掌の上で転がされていた！

突如、隔絶の壁の上から矢が雨のように降つて来た。頑強さを誇る

獣神族がハリネズミのように全身に矢を受け次々倒れていく。

「村長！伏兵だ！」

シユンの報告にサソリは耳を疑つた。

「馬鹿な！犬神族の鼻と耳を持つて、何故見破れなかつた？！」

そういうつている間に、道の左右の起伏から湧き水のように、見た事のない黒い鎧に身を包んだ人間がドッと溢れて來た。

サソリは直感した。出兵前にクルリの言つていた鉄の鎧だ。

「氣をつける！爪が利かないかも知れない！」

サソリは大声を出したが、もう遅かつた。

犬神族は初めて爪の通らない堅い防具を前に、混乱に陥つた。

思考が止まつてしまえば、いかに犬神族といつても、人間の方が数で圧倒的に勝つてゐるのだ。取り囮まれ、四方から槍で突かれれば

一たまりもなかつた。

サソリの目の前で、同胞が次々に倒れていく。

敗戦。

「血路を開け！一人でも多く村に戻るんだ！」

村から遠いこの地で、村の守り手は打ち倒され、大軍の人間が目の前で侵攻に向かっている。

なんておぞましい光景。

その時、肩にズシッと重い衝撃が走った。矢が刺さっている。刺さつて尚、サソリは信じられず、その矢を見つめていた。

私が、のろまな人間の矢を自分が受けたというのか。

「母さん！！」

ハツとしてサソリは目を上げた。

自分に向かつて剣を振り上げていた黒鎧の人間の首が飛んだ。

首を切り落とした人物がサソリを庇うようにして傍に立っていた。

神秘的な美しい銀髪が舞う。

サソリは思わず涙が出そうになるのを必死でとどめた。

後姿がそつくりじゃないか。

いつの間にか、この子はこんなに父親に似たのだ。

サソリは刺さつた矢に手をかけ、一気に引き抜いた。

痛みで頭が一瞬痺れ、すぐにスツと冴えていく。

戦場で感傷的になるなど、どうかしていた。

「助かったフウマ！私はもう大丈夫だ！お前は急いで村に戻つてくれ！」

フウマが少し戸惑つてサソリを振り返つた。

「村長は俺が守つて村まで行くから！お前が一番足速いし、無事に村行き着いた兵をまとめる奴がいるだろ。俺達はここで追撃食い止める！」

シュンがどこからか取つてきた人間の武器の鉄剣を担いでやつて來た。

よく見るとシュンだけではない。フウマも、今戦つて踏みとどまっている者は皆人間の武器を奪つて戦つている。

「へへ、皮肉なモンで、人間の作つた防具には人間の武器が一番つてね。」

サソリの目線に気付いて、シウンが抱いでいた剣を一本サソリに渡した。

なるほど、異形の者の筋力なら、人間よりもずっと強く鋭く剣を振られる。

剣の殺傷力が人間にとつて仇となつたのだ。

「フウマ！ 行け！！」

フウマはゴウツと風を唸らせて飛び出した。

一瞬で遠のいた息子の背中をサソリはもう振り返らなかつた。

「爪や牙が通じないなら、人間の剣を奪つて戦え！ 一人でも多く生き延びて村に戻るぞ！」

サソリの号令に、異形の兵達がオオーッと応じた。

こんな結果になると、誰が予測しただろ？
こんな大敗戦になるとは。

ギリギリと歯を噛み締める。

全速力で走りながら強く噛み締めたせいで、口の中が切れて血の味がして來た。

馬の蹄鉄の跡が、大地に敷き詰めたように隙間なく広がつてゐる。人間の通つた上を走つてゐるというだけで、フウマの心は燃えるような憎しみに包まれた。

フウマの鼻には、もう臭つてきていた。

木や布の燃える臭い、さらには血の臭いも肉が燃える臭いも。

陣に立てた赤い旗は燃え落ちて、黒煙が昇つてゐるのが見えるばかりだつた。

「…殺してやる… 殺してやるぞ… …」

村も母も心配だが、今心を占めるのはただ一人だつた。

あの黒髪が血に染まつてゐるのを見たら、自分はもう正氣を保つてはいなさう。

「人間を一人残らず殺して回つてやる… …」

フウマは搾り出すように咳き続けた。

そうしなければ口の中が自分の牙で血だらけになってしまつ。フウマには永遠に思えるほど長かつたが、実際、陣に辿り着いたのはあつとこう間だった。

「ルリ！ ルリはいるか？！」

一つ残らず焼かれたテントの燃えカスを縫うようにフウマは陣の中を回った。

ひどい炎だったのだろう。地面も黒くすすけている。薄い黒煙の中、陣の中を回っていたフウマは驚いて目を見張った。一つだけ、炎を逃れて無事に立っているテントがある。奇跡のようだった。焼けていないのはそのテントだけなのだ。記憶と照らし合わせれば、そのテントは医務用に立てられたテントだった。

垂れ幕をめぐつて中を覗いた瞬間、フウマはのど元に短剣を突きつけられた。

「…フウマ？」

ルリはフウマを見ると、慌てて短剣を引っ込んだ。

ルリは少し青ざめているが、今朝、出陣を見送るために顔を見せた時と同じ格好のまま、どこにも怪我なく、無事な姿だ。

「フウマ？ 平氣？」

へたり込むように座ったフウマを見て、ルリはさうして慌てて、フウマの顔を覗き込んだ。

「じめんね、また黒い鎧の人かと思つて…。」

短剣にビビって座り込んだように見えたらしい。違つと言つたが、フウマは安心のあまり全身の力が抜けて、しばりくすらつまく動かせなかつた。

「よく……、よく無事だつたな……。」

やつとそれだけ言つた。

するとルリは、ゆっくり頷いて、テントの奥に顔を向けた。

奥には一、三人の患者を寝かせるだけのスペースがあり、見てみれば、ルリの他に、クルリと薬師のガラン、他に給仕係で従軍していた村の者四人が身を寄せ合っている。

これが生存者全てらしかった。

そして、その中に、獣神族の遺体が安置されていた。
ひと目で、眠つているのではなく、死んでいると分かるほど、体の損傷がひどかつた。

手足は火傷で皮膚が黒く、どこかおかしな方向に曲がっている。
おそらく骨が幾重にも折れているのだ。馬に踏まれたのだろう。あの硬い鎧と戦つたなら、殴りかかって折れたのかもしない。
胴体は真っ赤に血で染まり、矢を抜いた跡が幾つもあつた。
しかし、こんなにも凄惨な姿で死んだこの獣神族の顔は。

「笑つて死んだよ。顔だけ見れば、まるで良い夢でも見ているような表情だろ。」

火に当たつたためか、縮れてしまつた白髪を尻尾で撫でながら、ガランが静かに口を開いた。

「信じられるか、村長の息子。こいつはな、つゝさつきまで生きていたんだよ。この怪我でだぞ。」

身を寄せ合つていた四人がすり泣くのが聞こえ始めた。

「このテントを守りきつて、安心したんだろうな。嬉しそうに笑つて、死んだ。」

フウマはこの青年が、毎晩このテントに来ていた獣神族だと気がついた。

「名を、覚えてやつておいてくれ。…ドリアムという。獣神族に聞けば誰もが知つてゐる、一族で一番の臆病者だそうだ。…たつた、たつた三晩薬をやって、話し相手になつただけのわし等を、魂を捧げて守つてくれた。」

フウマはドリアムの傍らにそつと片膝をついた。
焼け焦げて、肌の触感を失つた腕に触れる。胸一杯に何か流れ込んでくる。

あなたは手本を見てくれた。

憎いからでなく、守るために戦つて命を捧げる事の偉大さを教えてくれた。

引き継いだ。

俺はあなたが守ってくれたものを命を懸けて守る。
だから、安らかに。

第五話 再起

全てが手遅れだつた。

帰り着いた故郷はもう跡形もない荒地だつた。

一度だけフウマは天を仰いだ。

過ぎた時間が戻つて来るのを待つよつて、長くつづむく事はなかつた。

サソリは魂が抜けて落ちたように、しばらく身じろぎもしなかつた。夜になつて肌寒くなつたのを気にして、シュンが燃え残つた毛布を探ってきてサソリの肩にかけたのにも気が付いてないようだつた。

犬神の集落は壊滅していた。

砲弾に石積みは原型もないほど破壊され、家の家具は残らず炭になつていた。

サソリとシュン達、生き残りの兵が村に、いや、村だつた場所に戻つてきたのはフウマが辿り着いた次の日の昼だつた。

出兵した犬神族百名は六十名に、獣神族三百名は百五十名に減つていた。

フウマは一度サソリとシュンに顔を見せたきり、どこかに出かけてしまつてここにはいない。

「……この一大事にどこ行きやがつたあいつ。」

シュンはサソリの傍に控えて呟いた。

その声もサソリには聞こえていないうだ。

サソリはこの村を守る事に命を懸けてきたつもりだつた。

夫から引き継いだこの地を死ぬまで見守り果てるつもりだつた。

村が焼けただれて原型も留めない今、どうして自分は生き延びているのであらう。

夫の代わりのように大事にしていた銀獅子のつい立も燃えて残つて

いなかつた。

いつそ自分も一緒に燃え尽きたかつたとさえ思つ。

「村長！村長！ウォルだ！！」

シュンの叫び声にサソリは少し眉を動かした。

村の自警を一手に引き受けるウォルは、実力者だが万ーのために村の警護に残していたのだ。

ウォルは疲弊しきつた顔をしていたが、怪我もなく、彼本来の明るい表情を失つてなかつた。

「村長、すいません俺…任されたのに村をこんな有様にして…。」
ここまで走ってきたのだろう。まだ肩で息をしているウォルは息を整えながらサソリの前にやつて來た。

「でも、全滅はしてません！集落に残っていた女子供は、ほぼ守りきつて魚神族の集落にまで送り届けました。ここに踏みとどまつた自警団の連中はかなりやられましたが、五十名は生き残りました。多分自主的に逃げた奴等もいるはずです。だから見た目ほど犠牲は出でていな…。」

「もう、いい。」

サソリが息を吐くように呟いた。

ウォルとシュンがじつとサソリを凝視する。

「私は、村をこんな姿にした馬鹿な村長だ…。そんな報告を私にしないでくれ。」

「…しつかりしてくれ村長！済んじました事なんだ。あんたがそんなじや死んだ皆が浮かばれねえよ。」

シュンの言葉に一瞬サソリに自嘲的な笑みが浮かんだ。

「そうだな。私ばかりがのうのうと生きていては皆に悪い。死んで詫びたいよ…。」

「…村長…」

ウォルがさらに言い募ろつとした時、肩をガツと掴まれた。

フウマがいつの間にか戻つてきていた。

「ウォル、生きてたんだな。」

「はい、フウマ様。…村はこんな事になつてしましましたが、多くはここから一番近い魚神族の所に避難しました。」

言い終わつてフウマを見上げた瞬間、ウォルは思わず目を見開いてしまつた。

かすかにフウマが微笑んでいる。

「…そうか。良かった。」

微笑んでいたように見えたのは一瞬で、瞬きした刹那には無表情のフウマに戻つていた。

休まず全力疾走して戻つて来たせいで、目が疲れて幻覚を見たのかもしれない。

ウォルは表情を失つたフウマ六歳の時から十年間、彼の笑つた顔を見たことがなかつたのだから、そう思つのも無理はなかつた。

「あ、この馬鹿フウマ!…どこ行つてやがつたよ。」

「悪い。」

素直に謝られてシュンは面食らつた。

こんな戯言はもちろん黙殺されると思っていたのだ。

会つてなかつたのはほんの一日半だといつのこと、フウマの雰囲気はどこか変わつた。

「村長、この大事に傍を離れてすみませんでした。」

そう言つたフウマの横から、黒髪の小さな頭がヒヨイツと現れた。「サソリ様、フウマがここ離れたの私達を迎えに行つてたせいなんです。フウマを怒らないで下さいね。」

「ルリちゃん、無事だったのか! 焼けちまつた陣の中を随分探したんだぜ。」

ルリは満面の笑みをシュンに返した。それだけで空氣がガラリと明るくなる。

シュンは普段通りに振舞つていたつもりだが、本当に自然体のルリを見て、自分が必死で空元氣を振りまいていただけだという事に気が付かされた。

思わず苦笑する。ルリは自分の村を焼かれここに逃げ延び、そして

今度は逃げ延びた村も壊滅したといふのに、普段のよつて自分に笑いかけたのだ。

この少女は大物だ。

「私達、フウマの速度には到底付いていけないから、別行動でゆっくり村に進んでたんですよ。みんなは多分急いで追い越されたから気が付かなかつたのかも。私達も追い抜かれたの気が付かなかつたですし。」

シユンは少し首を傾げた。

急いでいたからといって、人間の残党に注意しながら進んでいたのだ。

犬神の嗅覚がルリ達を捉えなかつたのは少し不思議だつた。

「ルリ、お前には悪い事をした。」

かすれた声でサソリが言つた。

このかすれは戦場で声を嗄らして叫んだためだが、まるで一気に老けてしまつたようで痛ましかつた。

「好きなだけこの村に居れば良いと言つたばかりなのに、村が壊滅するとは……。」

ルリは真つ青な顔をしたサソリをじつと見返した。

そして、珍しく遠慮がちに口を開いた。

「…そんなに心を痛められているサソリ様の前で言つるのは難ですが、私は村がなくなる前と少しも気落ちしませんよ。」

サソリの顔は険しくなつた。

思わず皮肉口調に言い返している。

「異民族のお前だ。犬神の地がなくなろうひとつ心痛むものでもないのだろう。」

ルリは優しげに笑い返した。

「サソリ様、私もここに来る前は村びこりか、両親も村の者も全て失いました。」

サソリはハツとして口をつぐんだ。

その事実を忘れたわけではなかつたのに。

ルリの明るさを見ている内に、その事実が遠くに追いやられてしまつていた。

ルリは優しい笑顔のままだ。それが返つて自分の言葉の無用心さを浮き彫りにする。

その瞬間、長い眠りから醒めたよう、「ようやくまともな思考力が戻つたような気がした。

「すまない。どうかしていた。何て愚かな事を…」

「いいえ。実際、自分が生まれ育つた村でないから、気落ちも少ないのだと思いますよ。私も自分の村に帰れない事を納得するのに随分苦労しましたから、皆さんが今どんなに辛いか少しはわかつてゐつもりです。」

サソリもシュンも、みんなルリを見返したままじっと聞き入つている。

「私、昔から明るいだけが取り柄だつてよく言われてました。お父さんもお母さんも常に前向きでいられるのが私の最大の長所だつて。だから逃げる時、決めたんです。生きてる限り後ろは見ない事。前だけ見て生きて行く事。」

暗く寒い風が吹くこの荒地を、ルリの朗らかな声だけが響き渡つていた。

ルリの笑顔はこの信念に裏打ちされているから、こんなに強い。そしてあんなにも眩しく光るのだとシュンは思った。

「せつかくこんなに生き残つてるんですよ?これからどうするか、何をして生きるか。楽しい事考えましょー!」

ルリが明るく言った。

サソリは田を細めて、懺悔するように何度も何度も頷いた。

「村長、この地は捨てましょ。」

フウマがキッパリした口調で言った。

シュンは驚いてフウマを見た。提案の内容にではなく、フウマが方

針を提案するという事自体に。今までそんな事は一度もなかつたのだ。

「集落を作るには犬神の一族はあまりに少数民族となつてしまいました。これからは各民族に身を寄せて生きていくべきです。」

「サソリもポカンとした顔で相変わらず無表情の息子を見守つていてる。

「そ、そうだな…。少数で森の最前線にいるのはあまりに危険だ。そうするしか…ないだろ？。」

「サソリ様、サソリ様。私も提案があるの！」

楽しそうにルリが手を上げた。

サソリはまだポカンとした顔のままルリを見た。

「あのね、犬神族のみんなつて足が速いでしょ。村同士の連絡係になればいいと思うのー。」

「連絡係？」

ウォルが聞き返す。

「この敗戦の原因は、人間の作戦を読めなかつた事だけじゃありません。最大の原因是兵力不足です。」

フウマがまたキッパリ言った。

ルリ以外の三人は開いた口が塞がらないほど驚いている。

だいたい、こんなにハキハキと長い言葉を述べるフウマを見るのは初めてだ。

シュンはどうしたお前、と言いつこうなのを途中でやめて氣を取り直して同意した。

「確かにフウマの言うとおりだよ村長。人間はそれこそ湯水のように兵が居る。一つに団結しているからな。俺達は民族同士、疎遠な奴等もいるし、悪くすれば対立してるような民族もあるじゃねえか。これまでそれでも均衡が取れてた。でも、人間の扱う武器がこんなに改良された今、俺達だつて変わっていかねえと滅ぼされるの待つてるようなもんだ。」

嬉しそうにルリは頷いた。

「そう！だから犬神族が各地に散らばって、皆をまとめるのー。」

まとめるに一 口に言つても、大変に実現困難な事だが、夢のある提案だ。

故郷を失つて打ちひしがれる者にはこれ位が丁度良いに違いない。サソリはフウマとルリを交互に見つめた。

「二人でこの考えを思いついたのか？」

「はい。フウマが迎えに来てくれて、ここに辿り着くまでに話してたんです。」

「思いついたのはルリですよ。」

「どうすれば犠牲が減るかつて聞いてきたのフウマだよ。」

ルリが来てからといふものフウマの変わりようは著しかったが、今日ほどその事を実感する事はなかつた。

フウマの止まつていた時間が動きだしたのだ。

サソリはそれを肌で感じた。

「村長、どうする？」

決断を促してきたシユンに頷きかけると、サソリは立ち上がつた。

「集合……」

のどが嗄れて痛いはずなのに、張り上げたサソリの声には力がみなぎつていた。

思い思いの場所でぼんやりしていた犬神兵がサツとサソリの前に集まつた。

「我等はこの地を捨て、それぞれ他民族の村へ移ることとする！」

サソリは兵一人一人の顔を見渡した。みんな失望と疲労で、死人のような顔をしている。

「だが忘れるな！ただ移るのではない。我等の機動力を活かし、それぞれの村の交流を促すのだ。我等異形の民も団結しなければ生き残つていけないことを各民族に理解させ、人間に対抗するのだ！それをこれから我等の使命として生き抜いていこう！」

兵達はにわかに顔を上げ、ざわつき始めた。

ざわめきはやがて歓声となり、大きな雄叫びとなつて森を駆け抜けた。

夜中、月明かりの中を忍ぶように立ち上がったルリをフウマは見ていた。

明日にはここを出て、魚神族の村に行つて生き残りの犬神族と合流する予定である。

今夜は各々、枯葉を大量に集めて敷き詰め布団代わりにしたり、大きな石を風除けにして野宿していた。

フウマは仮眠を少しどつた後はずつと見張りに起きているつもりだつたので、一人背の高い木に登り、気配を探つていた。

そこへ、ルリが一人で村の焼け跡に歩いていくのが見えたのだ。フウマは音もなく木から降りた。

ルリは月明かりが最も良く照つている場所で何か作業をしていた。明かりが欲しかつたらしい。

「…何してる？」

フウマが音もなくルリの後ろまで来ると言った。

ルリは心底驚いたようで、飛び上がった。

「やだ、フウマ！ 脅かさないでよ！」

他の者を起こさないように、ルリは小声で怒った。

「それは…」

ルリの手に握られているものを見て、フウマは口をつぐんだ。ゴツゴツしたルリの人差し指の長さほどもある牙が一本、その手に握られていた。

こんなに大振りな牙の持ち主は獸神族しかいない。
それですぐに誰のものか予測が付いた。

「ドリアムの牙か。」

「…うん。」

目の裏には凄惨な姿になつたドリアムがまだ焼きついている。
好きな者達を守るために命を捧げた青年。

遺体は彼が死んだあの荒地で焼いてきた。異形に死者を埋葬する習慣はない。死ねば体は物であり、木や枯葉と同じように火にくべる。焼くのも、腐つて腐臭がないようにするための処置だ。

フウマは村へ急いで立つたので、ドリアムの遺体を燃やす所を見届ける事は出来ず、ルリが牙を抜いて持ち歩いているのも知らなかつた。

「犬神族は呪術とか信じるのかな？」

唐突にルリが聞いた。

「呪術か？やつた事もないし、見た事もない。人間がやるものだと聞いていた。」

「そうなんだ。私の村ではね、普通に行われてたんだよ。父は占い師だったの。昔から病気をするのは体の中に悪い精霊が入ったからだと信じ、占い師や呪術師が処方したの。それで父は薬にも詳しかつた。」

親の事についてルリが詳しく語るのは初めてだつた。

フウマは静かに聞いていた。

「私の村では死んだ者の魂は口から出て行くとされていたの。だから、牙は最後に魂が通つた所とされて、形見に持つてていると守つてくれるって言われてた。」

そう言つて自分の持つている短剣を抜いて、ドリアムの牙に当てる。紐を通すための穴を開けようとしているのだ。

「…貸してみる。」

フウマは牙に爪を突き刺した。あつという間に小指の先程の大きさの穴が開く。

ルリは医務用のテントにあつて火の手を逃れた、なめし皮を紐状にしたものを取り出した。

開いたばかりの穴に紐を通し、一つの首飾りにした。

「はい、フウマ。」

その内の一つをルリがフウマの方に差し出した。

「え…っ」

フウマは硬直して差し出された牙の首飾りを見た。

まさか自分のためを作っているとは思わなかつたのだ。

フウマが動かないでの、ルリが「いらない?」と不安そうな顔で覗き込んできた。

フウマは少し慌てて「いや、もう一つ」と首飾りを受け取つた。

「一つはフウマに。もう一つはガラン先生にと思つてたんだけど、先生はもう老い先短い老人だから守つてももう必要はないつて言つた。だからこつちは私が付けてる。」

そう言つと、残つたもう片方の首飾りを自分の首に掛けた。華奢なルリが付けるには、ドリアムの牙はいかつ過ぎるといつにも見えたが、同時に頼もしくも感じた。

フウマは呪術など全く信じないが、その牙には本当に力があるといつも見えたのだ。

「これを見ると、気が引き締まる。」

フウマが手の中の冷たい牙の感触を確かめながら言つた。

この牙の持ち主には多くのことを誓つたばかりだ。

俺には良い戒めだと思つた。

ただ憎しみで戦うのではなく、戦いは守るためにあるのだといつも忘れないための。

ドリアムの元を離れて村に向かつ途中、色々な事を考えた。

自分の守りたいものは何か。どうしたら守れるか。

それを考えながら走つていると、人間への度し難い憎悪は浮き上がつてこないのだった。

「ほら、フウマも首に掛けて。」

ルリに促されてフウマはそろそろと首に掛けた。

恐る恐るになつてしまつたのは、これを掛けると一つ懸念が生まれるからだ。

ルリが嬉しそうにその懸念をズバリ言い当てた。

「おそろいだね。」

「……。」

シユンに見られたら、何でからかわれるか分かつたものじゃない。
ましておそろいじや、他の誰から見てもそういう関係に見られるだ
ろづ。

かすかに青くなつたり赤くなつたりしているフウマをルリは不思議
そうに見ている。

牙はまるでそんなフウマを笑うよつて、月明かりに照らされてツヤ
ツヤと光っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6393c/>

闇より黒い

2011年1月2日14時31分発行